

いたり、あるいはいじめられる側の問題として指導の手をこまねいている担任など、この問題をとおして、「教育者」の陰の実像に触れた思いがしました。それが子どもたちにとっては、学級王国といわれる担任の裏の実像であることを考えると、死しか方法がなかった鹿川君の追いつめられた気持はどんなであったか、想像するに難くないと思います。

人が集団で生活している限り、強い者が弱い者をいじめたくなるのは、人間の悲しい性さがかもしれません。だからいじめがあっても仕方がないというのではなく、一人一人の子どもが自分より弱い者をいじめたくなる心を control 出来る人間に育てていくことが、大切ではないでしょうか。今回は相談に来た何人かのいじめられっ子やいじめーいじめられの研究（東京都立教育研究所紀要三十一号「いじめーいじめられの心理と構造に関する基礎的研究」）を通して、この問題を考えてみたいと思います。

事例一 幼稚園以来ずっといじめられ続けてきた太郎君

太郎君は中学一年生ですが、幼稚園以来ずっといじめられてきた子どもです。中学に入り新学期早々の四月下旬、授業中いきなり大声をあげて仁王立ちになり、椅子を振りまわしたとのことで、学校から相談室を紹介されて、相談にみえました。この事件が起る前から、しょっちゅう「あっ、あっ」と声を出していたり、時には体を大きく前後にゆするので、彼のまわりの席の者は落着いて授業を受けられないというのです。

あまりに症状がはげしいので、病院にも行って見たところ、憤怒いれんといれんとの診断でした。これは体の中にたまった怒りが、発声や律動連動の形で発散されているということのようなりました。

◎学級全体で一人をいじめる◎

太郎君の話をよく聞く一方、お母さんに太郎君の様子を観察してもらった結果、こうした怒りの発作は級友からのいじめが特にひどい日に多いことがわかってきました。授業中、後の方から消しゴムが飛んでくるのはしょ

っ中で、休み時間にトイレから戻ってみると、シャープペンシルの芯が全部折られていたり、教室の移動で廊下を歩いていると不意に横から足蹴りをされたり、すれ違わざまに頭を小突かれたりは毎日のようでした。仁王立ちになったその前日は、のどがかわいたので水を飲んで席に戻ると自分の席が黒山の人だかりになっているのです。何事かと思つて近づいてみると、女の子が自分のカバンの中から生理由のナプキンを取り出して、「いやぁねえ、こんなもの持つてるう。エッチ!!」と皆の前で騒いでいるのです。びっくりした彼がいくら「違う」「僕は知らない」と言っても、「カバンの中から出てきたんだから、ウンを言ってもダメ」と受けつけてもらえませんでした。その前にも身体検査の日、男子五く六人に囲まれて、あつという間に中に女子がいる保健室へ入れられて、あとで先生に叱られたことがあったので、彼は皆から「エッチ、エッチ」とはやし立てられるようになっていたのです。

◎ いじめられる方が悪い◎

家に帰つてその日の出来事をお母さんに聞いてもらうことで、学校での気持を解消していたようですが、あまりにひどいのでお母さんが担任の先生に話したところ、「やられるのはやられる理由があるからです。何をやってものろくて、皆とテンポがあわないし、授業中の彼は目障りで、こっちも落着いて授業が出来ない位です。まず自分を治そうとしないで、まわりにやめてくださいというのは、お門違いではありませんか」と言われてしまいました。その上「中学生にもなって一々、親がこんな事を学校に言ってくるのは過保護です。親が過保護だから、子どもは自分を反省しようとしなのではないか」ととりつく島もない態度でした。また「生徒たちは遊び半分でやっているのに、その遊び心がわからない彼の方が問題だ」とも言われてしまいました。

◎ 自傷行為へと発展し、「病氣」ということですまされてしまった彼のいじめられ◎

今は元気に高校生活を送っている彼の中学校三年間は、鹿川君ではありませんが、地獄のような毎日だったと思います。いじめても先生たちが彼の方に原因があると思っっているのです、生徒たちにとってはいわば公認されたいじめでした。結局、事態は次第に悪化し、家に帰るなりお風呂に飛び込んで、頭のとっぺんから足の先まで長時間もかけてきれいにしないと気がすまなくなりまして。小突かれた頭を、毎日シャンプー一本使って洗っても、まだ不潔感が残ると言うのです。そして、ついには「生きていてもしょうがない」と自分に包丁を向けるようになり、入院を余儀なくされました。その結果、学校は「ああ、やっぱりあれは病気だったのだ」と結論を下し、彼の日々の苦しみを理解しようとする動きは最後までみられませんでした。誠に残念な事ですが、彼の入院後、この学校は対教師暴力の火の手が上がり、校内暴力事件に揺れたということです。

事例二 トラブルメーカーの次郎君

——社会性が育っていない故の嫌われ者——

次郎君は小学校一年生ですが、一人っ子で大事に育てられてきたせいとか、集団のルールを知りません。何でも自分が中心でないと騒ぎ立て、友だちの物でもほしいと思おうと黙って持って行ってしまいます。それで時々、友だちとけんかになるのですが、先日も休み時間に皆とボールけりをしていて、自分がけたボールがそれて、そばで遊んでいた女の子に当たってしまいました。ところがあやまることを知らないのです、相手の子が泣き出しても知らん顔をしていました。そこで気の強い女の子に「次郎君、あやまんないよ」と言われたのですが、こういうことに慣れていない彼は素直にあやまることが出来ず、皆に向かって「イーダ」をやって逃げ出してしまったのです。こんな事が重なって、だんだん次郎君と遊ぶ者がなくなり、彼は友だちを求めてチョッカイを出してまわるといふ悪循環が始まりました。

◎子どもと距離のない母親◎

担任の先生は低学年の担任らしく、きめの細かい指導を心がけ、休み時間も出来るだけ子どもたちと共に過ごすようにしていました。そうした中で次第に次郎君の社会性のなさに気づいたのですが、すぐにお母さんに言うのではなく家庭訪問の折まで待って、思い切って話題にしてみました。ところがお母さんは「良いお子さんですね」とほめられることは予想していたけれども、学校で困った子に思われているなんて「うそです。私、耐えられません」とひどく感情的になり、とても冷静に次郎君への対応を話しあえる状態ではありませんでした。以来「先生はうちの子を悪くしか受けとらない」と近所の同級生の親に言ってしまうわり、次郎君も次第に先生の注意をきかなくなってきた、困っているということでした。

事例三 成績が良いということが隠れ蓑に

これは小学校六年生の学級に起ったはじめです。

夏子さんは才色兼備の活発な女の子です。どこかに人を惹きつける魅力があるらしく彼女のまわりにはいつも

友だちが絶えず、四年生以来ずっと学級委員をつとめています。担任の先生もそんな彼女に全幅の信頼を寄せており、学級経営の中で、時にやんちゃぶりを発揮して困らせる男の子たちをリードしてくれるのを期待している一人です。

二学期に入り、いつも彼女のグループと行動を共にしていたはずの秋子さんの様子がおかしいのです。休み時間になっても皆といっしょに外に出て遊ぼうとせず、一人で教室で本を読んだり、ボンヤリとしています。他の女の子たちも、皆申しあわせたように秋子さんをわざと避けて通り、今までのように誘う者は誰一人としておりません。ある日いつになく給食が残ったので不思議に思い、学級会で話題にしました。ところが皆押し黙るばかりで、時々お互いの様子をチラチラとうかがう者がいる程度でした。明らかに誰かの指令に従っている雰囲気、女の子の集団から秋子さんがシカトされているらしいことが分かりました。給食が残ったのは、その日の給食当番が秋子さんだったので、皆で「バイ菌がついてい

る」「汚い」と食べるのをやめた結果とわかりました。

◎意外にも指令指揮官は学級委員だった◎

女子集団に一連の指令を出しているのは誰か。担任の先生は、学級の女の子たちの急速な変ぼうぶりにびっくりすると共に、早速、事件の解明に乗り出しました。しかし他の事柄であれば何でも素直に応じる子どもたちが、秋子さんの事に及ぶととたんに、皆一様に口を閉ざし、その結束の固さは想像以上でした。日頃、気が強く友だちとトラブルの絶えないあの子ではないか、いや大人の前ではおとなしそうにしているけれども、友だちの中では結構威張って命令調のこの子ではないかと疑心暗鬼の目で学級の女の子たちを見る日が続きました。結局、この事件の張本人は何と学級委員の夏子さんだったのですが、それが明らかになった時の担任の驚きは、自分のこれまでの教員としての経験と自信を覆してあまりあるほどでした。この打撃と他の子たちへの申しわけなさで、しばらくは教室へ行くのがつらい毎日だったとい

うことです。

◎理解し難い理由でも仲間はずれに◎

夏子さんが、何故かくも徹底的に秋子さんを仲間はずれにしたか、その理由を聞いてみますと、秋子さんが私立中学を受験するのがうらやましかったということですから。大人には到底理解し難い理由ですが、こういう理由がまかり通り、強い者にすぐ同調するというのも最近のいじめにみられる特徴の一つかもしれません。

◎「良い子」の中にも魔性が潜んでいる◎

成績がよく、明朗活発で誰の目から見ても申し分のない優等生ということ疑うことすらしない一方、しょっちゅうトラブルを起している、わがままが目立つ等というだけでその子を疑ってかかる傾向は、教師の偏見としてよく子どもたちから指摘されることです。この担任も真相の究明を急ぐあまり、同じ轍を踏んでしまったと言えましょう。しかしこの一件で夏子さんの評価を下げるので

はなく、「あれだけの組織力をもってやれたのは、彼女ならではだと思ふ」との言葉に、長いこと教師をしてきた人の見識を感じました。

以上の三つの事例を紹介する中でお伝えしたかったことを最後に簡単にまとめてみたいと思います。

事例一の太郎君の例で、いじめられるのはいじめられる側に問題があるとして、指導しようとしないうちに教師を登場させました。確かに大勢の生徒の中には、皆とテンポがあわない、奇妙なくせをもっている等、自分とどこことなく肌があわない、いわゆる相性の悪い生徒、極端に言えば生理的な嫌悪感を刺激される生徒がいるかもしれません。教師として人の子ですから個人的な感情を否定することは出来ませんが、だからといって感情をむき出しにしてよいとも思われません。自分の感情を如何に control するかということは、教師という職業の専門性を問う一つの基本的な問題だと思いますが如何でしょうか。

事例一ではまた、いじめられやすい子の特徴なるもの

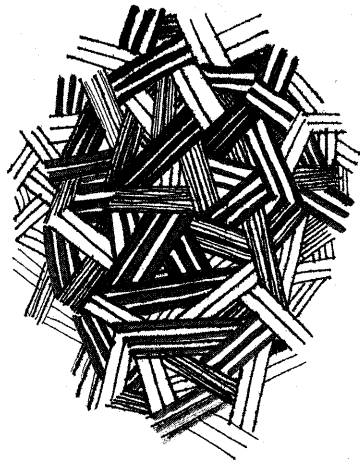
に触れない努力をいたしました。それはその子がどんな特徴や皆との違いをもつていようとも、そのことを理由に（たとえば太郎君の場合は、「あつあつ」と声をあげ、体を前後に大きくゆする等）いじめてもよいという理屈は成り立たないという考えからです。事例三の夏子さんのように、理由にならない理由をつけて、いじめを正当化したがる今の子どもたちの風潮の前に、大人は大きく立ちほだかることが必要ではないでしょうか。物わりのよい大人たちに囲まれて育つ若者の将来が案じられます。

事例二では最近の少子化の傾向の中で、我が子かわいさのあまり、子どもの実感が見えなくなってしまっている母親をとりあげたつもりです。この担任の先生は気をつかいつつ「お宅の次郎君は……」と言ったと思うのですが、このお母さんの耳に届いた時には、「あなたは……」というように翻訳の機能が作動して、まるで自分が先生から注意されているかのような錯覚にとらわれたの

ではないでしょうか。母子の共生関係が子どもの成長を疎外している一例といえます。

事例三では、極めて健康な子どもでも、時に残酷な行為をとりうることを示しました。夏子さんがしたことを彼女と話しあう中で分ったことは、人をいじめる後めたさよりも、相手の困った顔を見て楽しむ気持の方が大きかったということです。「秋子さんを皆で仲間はずれにしてどんな気持がした？」との問いに、「面白かった」と答えたのです。まるで人間を玩具に見立てて遊んでいるのと同じ感覚に驚かされると共に、指導をしにくくさせている一面を垣間見た思いがします。事例一でちょっと触れたことですが、いじめた子にどうしてそんなことをしたのか尋ねると、「遊びでやっていた」と答えることが多いのです。「遊び」すなわち悪気でなければ許してもらえぬ育ち方をしてきた子どもたちに、逆手をとられた思いのする事例です。物わかりのよい、甘い大人の存在も大切ですが、時に悪気でなくても、いけないことはいけないとする毅然たる態度も必要な気がしてなりま

せん。



(東京都立教育研究所)